

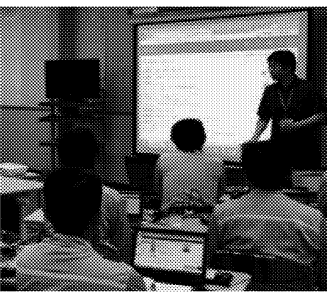
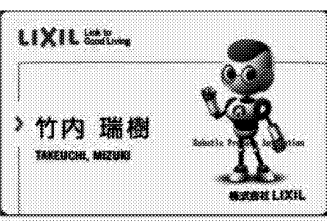
マネジメント講座

RPA（ロボティック・プロセス・オートメーション）をデジタル・レイバーとして使いこなすことで我々は仕事・生活・社会の3つにおける「楽しさ」を享受できるとした。今回は「仕事」が楽しい職場に変わったLIXILグループの事例を紹介したい。

同グループでは本格導入から1年もたないうちに社員約500人が当たり前のようにデジタル・レイバーと協働し、革新が進行中だった。

「現場では仕事が奪われるなんて感情は少なく、毎日のうんざりする定例作業を自ら自動化していくことを楽しんでいく」と情報システム本部RPA推進チームの竹内瑞樹氏は語る。

当初より社内に専門教育部署を設け、社内検定試験を用意、合格者は名札にシール（写真④）を添付、全社公開され、部署や会社が変わっても、名札を見てコミュニケーション



竹内氏のRPA研修で楽しい職場が作り出されていく

社員や組織の進化支える

RPA入門⑥

ンが生まれ始めた。社内フェイスブックには開発者と関係者が参加し、意見を話し合っている。

現在90を超える部門でロボットが稼働し、すべてのアイデアが自動化されれば全体として13万時間の生産性効果をもたらすこととなる。しかし「一人ひとりの社員の進化の結果としてビジネスモデルが進化し続ける組織となること」（同氏）こそが重要な成果という。

デジタルトランスフォーームの時代は、世界中で誕生するテクノロジを当事者意識を持って取り込む必要がある。重要なことは現場のオペレーションやビジネスモデルを環境変化に先んじて進化させる組織やチームが勝ち残るといふことだ。

仕事から労働を差し引くと自己実現や表現に時間とエネルギーを費やせる。社員が喜々として日常を革新する、仕事が楽しい環境は我々が迎える未来の現実である。

（RPAテクノロジーズ代表取締役社長 大角暢之）